

伊都診療所の利点と課題：九州大学伊都キャンパス内に新たに設置された診療所

土本，利架子
九州大学キャンパスライフ・健康支援センター

梶谷，康介
九州大学キャンパスライフ・健康支援センター

佐藤，武
九州大学キャンパスライフ・健康支援センター

平林，直樹
九州大学伊都診療所

他

<https://doi.org/10.15017/4372011>

出版情報：健康科学. 43, pp.25-31, 2021-03-25. 九州大学健康科学編集委員会
バージョン：
権利関係：

— 総 説 —

伊都診療所の利点と課題

～九州大学伊都キャンパス内に新たに設置された診療所～

土本利架子^{1)*}, 梶谷康介¹⁾, 佐藤武¹⁾, 平林直樹²⁾, 永野純¹⁾, 入江正洋¹⁾,
眞崎義憲¹⁾, 山本紀子¹⁾, 丸山徹¹⁾

The advantages and issues of Ito Clinic

- A newly established clinic at the Kyushu University Ito Campus -

Rikako TSUCHIMOTO^{1)*}, Kosuke KAJITANI¹⁾, Takeshi SATO¹⁾,
Naoki HIRABAYASHI²⁾, Jun NAGANO¹⁾, Masahiro IRIE¹⁾, Yoshinori MASAKI¹⁾,
Noriko YAMAMOTO¹⁾, and Toru MARUYAMA¹⁾

Abstract

Ito Clinic is a bedless clinic that is registered for medical insurance. It was newly established at the Kyushu University Ito Campus to contribute to the health management of the university students and faculty members and community medicine. The clinical department includes internal medicine and psychiatry. In addition to the introduction of the clinic, we considered its characteristics from the perspective of psychiatric practice. The advantages are as follows: (1) it is possible to treat patients who are difficult to treat at the university health management center, (2) it is easy to collaborate with participants in the university, (3) it can meet the increasing demand for psychiatric care, (4) it provides convenient access to the clinic, (5) it is possible to treat international students, (6) and it allows medical treatment by both internal medicine and psychiatry specialists. The issues are as follows: (1) an insufficient contribution to community medicine, (2) an inadequate treatment system for severe psychiatric disorders. We will probably face various difficulties, but we hope that we expect to contribute to health management both inside and outside the university.

Key Words: psychiatric treatment, mental health, university students, bedless clinic

(Journal of Health Science, Kyushu University, 43: 25-31, 2021)

1) 九州大学キャンパスライフ・健康支援センター Center for Health Science and Counselling, Kyusyu University, Japan.

2) 九州大学伊都診療所 Ito Clinic, Kyushu University, Japan.

*連絡先：九州大学キャンパスライフ・健康支援センター 〒819-0395 福岡県福岡市西区元岡 744 Tel : 092-802-5881, Fax : 092-802-5880

*Correspondence to: Center for Health Science and Counselling, Kyusyu University, 744 Motooka, Nishi-ku, Fukuoka, 819-0395, Japan.

Tel: +81-92-802-5881 Fax: +81-92-802-5880 E-mail: tsuchimoto@chc.kyushu-u.ac.jp

はじめに

九州大学は、伊都キャンパス・病院キャンパス・筑紫キャンパス・大橋キャンパスで構成されている分散キャンパスである。この中で伊都キャンパスは最も新しく、箱崎地区・六本松地区・原町地区の旧キャンパスから統合移転する形で設置された（図1）。伊都キャンパス移転プロジェクトは、旧キャンパス施設の老朽化や狭溢化の問題、そして箱崎地区が福岡空港に近いことから航空法上の高さ制限などの為に様々な制約を強いられ施設の再開発整備の障壁になっていることなどを背景に、キャンパスが分離していたが故に困難であった全学教育と専攻教育・大学院教育の連携の円滑化や共同研究の推進化を目的として発足することとなった¹⁾。

移転計画は2005年10月から開始され、3期に分けて進められ2018年9月に完了した所である。伊都キャンパスは都市部から離れた福岡市西区の自然豊かな地域に位置し、単独キャンパスとしては国内最大級の広大な面積（2,717,130 m²）を有する。箱崎地区で問題となっていた騒音は殆どなく、教育や研究に集中できる環境であると言える。しかし一方で、周辺的生活環境については十分に整っているとは言い難く、今後の開発・発展が期待される。

周辺の医療事情についても同様であり、気軽に受診できるような立地にある医療機関は限られている為、病院を受診する際にはある程度の時間を確保する必要がある。授業や業務に支障をきたすことを避ける為に受診を後回しにするようなことも有り得、伊都キャンパスを活動の拠点としている学生や教職員の健康管理

という観点から考えると、これは看過できない課題であった。

このような経緯から、「九州大学アクションプラン2015」²⁾の大きな柱のうち「学生・教職員が誇りに思う充実したキャンパスづくり」の取り組みの一つとして、2019年2月1日に九州大学伊都キャンパス内に新たに伊都診療所が設置される運びとなった。伊都診療所は保険医療機関の指定を受けた無床の診療所であり、所長である内科医1名、看護師1名、事務職員3名（受付業務含む）が常時勤務している。また、2019年11月1日には診療所のすぐそばに調剤薬局が設置され利便性も向上した。標榜している診療科は内科と精神科であり、筆者の所属する九州大学キャンパスライフ・健康支援センターの医師教員は伊都診療所に非常勤医師として勤務し診療を担当している。

伊都診療所の特色

ホームページ等で検索してみたが、附属病院や保健管理センターとは異なる独立した医療機関をキャンパス内に設置している大学は、筆者の知る限りでは他に例がなく、伊都診療所の設置は非常に興味深い試みであると思われる。

本稿では、主に筆者の担当である精神科診療の観点から、伊都診療所の特色についてその利点と課題を検討してみる。

1. 伊都診療所の利点について

キャンパス内の保険医療機関で精神科診療を担当できる利点については、以下の点が挙げられる。

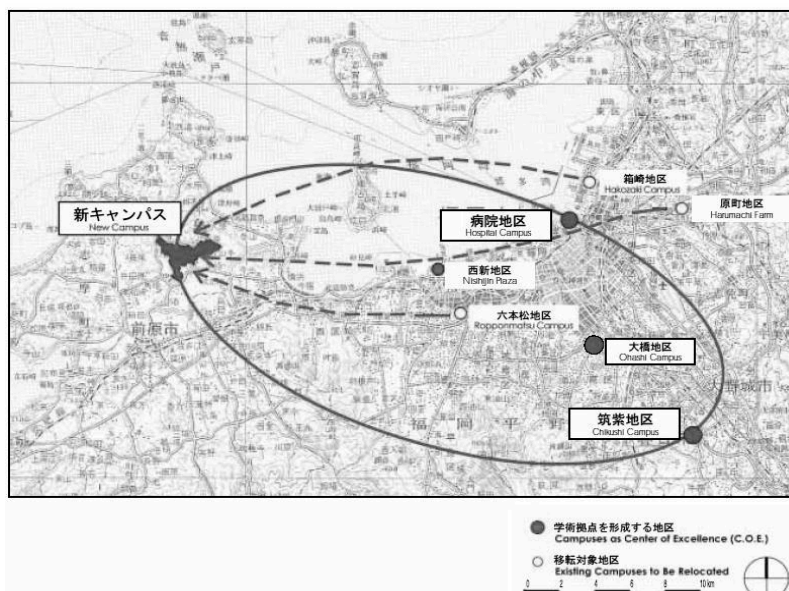


図1. 九大広報 伊都キャンパス誕生記念号 (2005) より

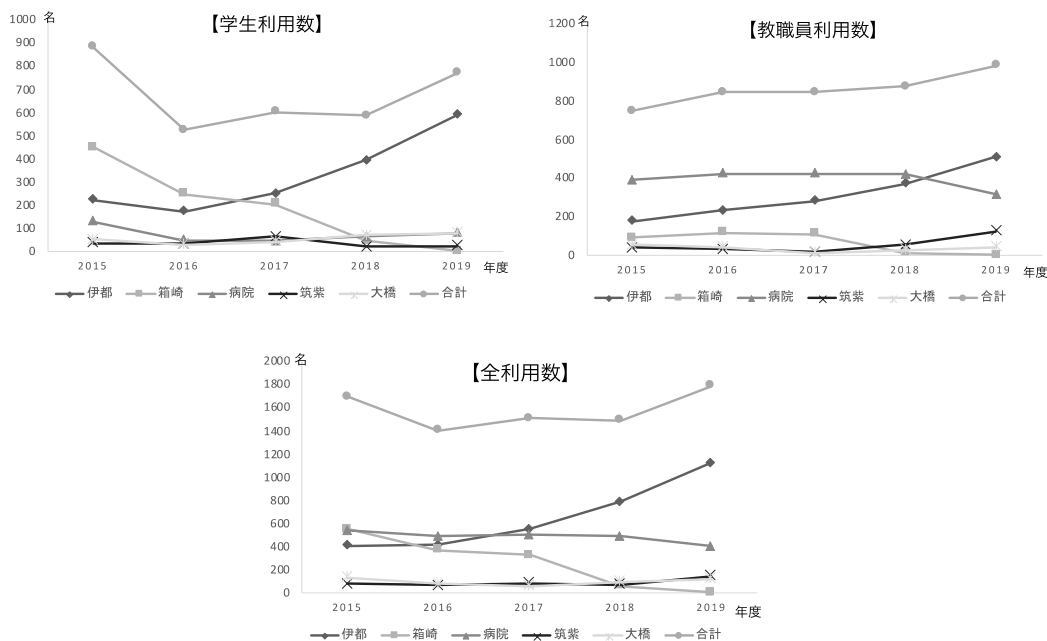


図2. 健康相談室 精神科対応延べ人数 *2018年8月に箱崎地区健康相談室は閉鎖

- 1) 健康相談室では対応が難しいケースの診療が可能である。
- 2) 健康相談室から継続した治療を行うことができ、学内連携がとりやすい。
- 3) 昨今のメンタルヘルス関連の相談件数の増加のニーズに応えることができる。
- 4) 学生や教職員にとっては、通院時間が短縮でき授業や業務、研究活動への支障をきたしにくい。
- 5) 外国語対応もある程度可能であり、これまで難渋していた留学生の通院先の選択肢の一つとなる可能性がある。
- 6) 内科診療も対応できる為、心身両面からのアプローチが可能である。

1) ~4) について論じるにあたり、キャンパスライフ・健康支援センター健康相談室について簡単に説明しておく。健康相談室には内科医と精神科医が所属しており、学校医・産業医としての役割を担っている。学生については無料で診察や薬物療法を提供しているが、学内のサービスの一貫であることから処方できる薬剤は種類・期間ともに限られており、また十分な検査も困難である為、対応は軽症のケースに限られる。しかし実際は、中等症以上や長期的な治療継続が必要と予想されるケースも少なくなく、そのような場合は外部の医療機関を紹介することとなる。今回、市中の精神科を標榜している医療機関と同様の水準の診療が可能である

伊都診療所がキャンパス内に設置されたことで、健康相談室からの治療継続が円滑になることが期待される。

他の診療科と同様、伊都キャンパス近辺の精神科関連の医療機関は限られており、これまでは紹介してもすぐに予約が取れず、受診を待つ期間に病状が増悪するケースがあった。また、ようやく医療機関を受診できても、授業を休むのが難しいとか足を運ぶのが面倒になってしまったなどの理由で継続的な通院治療につながらないケースもあった。キャンパス内に診療所ができたことで、昼休みや授業の合間に受診でき、また学内の医師が担当することから受診が途切れた場合にも学内関係者と連携がとりやすいことでフォローしやすく、外部の医療機関よりも治療継続に導きやすくなるのではないと思われる。

3) について、参考までにキャンパスライフ・健康支援センターにおける過去5年分の健康相談室での精神科対応数を示す(図2)。伊都地区の精神科対応数は、移転が進むにつれ増加傾向であることが分かる。特に学生についてはそれが顕著である。九州大学キャンパスライフ・健康支援センターではメンタルヘルス関連の対応強化を目的に、それまで長く1名体制であった精神科医を2014年より2名に、そして2017年には現在の3名体制に増員した。今回伊都診療所で精神科保険診療を行えるようになり、これまで以上に充実した支援に繋がることが期待される。

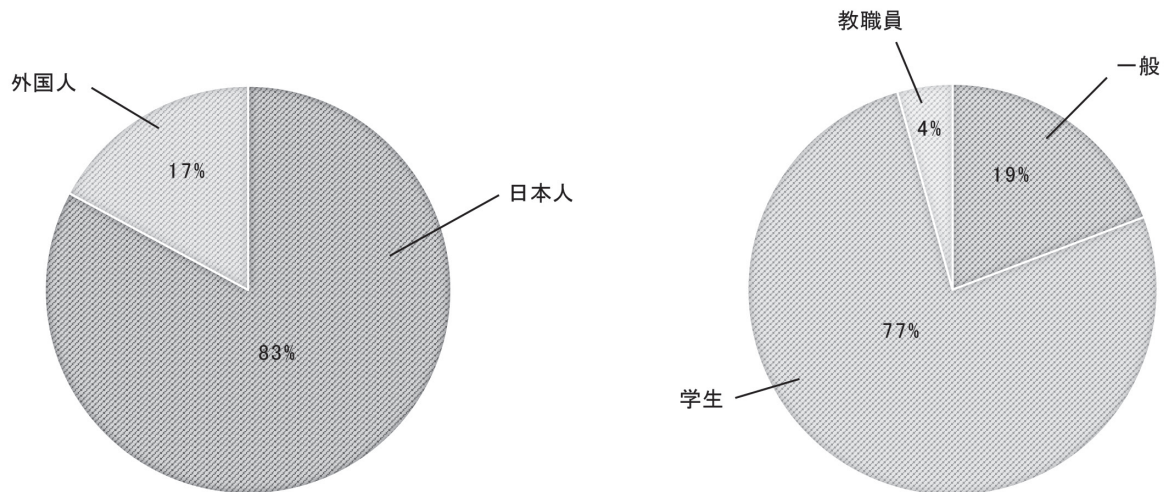


図3. 伊都診療所 精神科受診者割合 (2019年2月~2020年12月)

5) について。九州大学には 2,328 名の外国人留学生在籍 (2020 年 5 月 1 日現在) しており、国内でも有数の留学生数を誇る。しかし、その一方で様々な事情からメンタル不調に陥る留学生も一定数存在するのが実情である。九州大学キャンパスライフ・健康支援センターでは、留学生センターと協同し外国語対応可能 (現在、英語と中国語に対応可) なカウンセラーを複数配置し対応にあたっており、そのニーズは高まるばかりである。留学生について、医療的介入が必要になった際に対応可能な医療機関を探すのに難渋することが多いのは、本学においても他大学と同様の状況である³⁾。このような場合に、伊都診療所精神科への通院という選択肢が追加されることは大変意義深いと考えられる。実際、伊都診療所が開所してから 2020 年 12 月末までの精神科受診者の属性を調べてみると約 2 割が外国人であり、留学生のメンタルヘルスケアの一役を担っていると言えよう (図 3)。

6) について。総合病院や有床の精神科病院を除く一般の精神科診療所において、内科専門医が常に勤務している環境を整備している医療機関は滅多にない。その為、一般的な精神科診療所では身体的な問題が疑われる際は専門科のある別の医療機関への受診を促すことになる。しかし伊都診療所には総合内科専門医である所長が常に勤務しており (不在時は当センターの内科医が勤務)、診療時間内であれば内科診療をいつでも受けられる環境が整っている。小規模診療所にも関わらず内科・精神科ともに専門医がそろって勤務する体制が整っている、という点では他に類を見ない診療所であると言えよう。身体面についてのコンサルトが気

軽にできる環境であることは、治療者側も患者側も大変心強い。これにより、後日紹介状を持って他院を受診し直すという患者側の負担を軽減できることを考えると、内科と精神科の両方を標榜している点は大きな強みであると言える。

2. 伊都診療所の課題について

利点と表裏一体の面はあるが、キャンパス内にあるがゆえの課題と、現状非常勤で対応している精神科診療の限界について検討を行う。

1) 受診者の動向について

前述のように、伊都診療所はキャンパス内にある為に学内で多くの時間を過ごす学生や教職員にとっては受診しやすいというメリットはあるが、その一方で長期休暇などの期間は地元へ帰省する学生も多い為に一時的に受診者数は減少傾向となる。これは、全体の受診者数に占める学生の割合が非常に多いことが強く関連している (図 3)。教職員の受診割合が極端に少ないのは、精神科診療を担当している医師は大学の産業医の役割も担っている為主治医としての役割を兼ねることは避けるようにしており、基本的に教職員には別の医療機関を案内するようにしているからである。全体に占める大学構成員以外の一般患者の受診割合が少ない為、大学特有の事情に総受診者数も大きく左右され、診療所の経営状況はその影響を直接受けることになる。伊都診療所のコンセプトは「地域に根ざした診療所」であり、地域に開かれた医療を提供し周辺住民等の健康を守る役割を担うことをも目的に設置されたが、現時点では学内向けの診療所という役割が大きい印象であ

ることは否めない。地域住民にとっては、大学構内にあるということの敷居の高さがあるのかも知れない。地域医療への貢献は必須であり、診療所の経営状況の安定化という意味でも重要な課題である。

図4に開所から2020年12月末までの伊都診療所精神科の月別受診者数を示す。診療所開設当初は学内外双方への広報の不十分さもあり、受診者数は伸び悩んだ。調剤薬局の誘致が診療所開設の時期に間に合わなかったのもこの受診者数抑制に影響している可能性があるが、2019年11月に徒歩1分程の近接した場所に調剤薬局がようやく開設され、ユーザーの利便性は高まった。また、アンケート実施等でユーザーの声を聞きながらホームページやパンフレットの更新・診療所前の看板の改良・案内板の設置・路線バス乗り場案内への追記などの工夫を重ね、学内外への周知を図っていった。これらの効果もあり、受診者数は着実に増えていった。しかし、2020年度はCOVID-19の影響により4月～8月の期間は学生の授業はほぼオンラインとなり、大学全体として学内に立ち入る人数を可能な限り制限する措置をとったことで、診療所の受診者数は再び落ち込むこととなった。

9月1日から段階的に制限が緩和され10月の後期授業開始からは対面での授業も徐々に再開されるようになり、キャンパス内に学生の姿が戻りつつある。しかし、この自粛期間中に生活リズムの乱れから心身のバランスを崩す学生や、他者との接触が減少したことからの不安感や気分の落ち込みが出現するなどして修学に影響が出ているような学生もおり、10月以降の精神科受診者数は増加傾向である。COVID-19のメンタル面への影

響についてはこれまでに様々な報告があり、うつや不安傾向、物質依存の増加などを指摘した先行研究が散見される。さらにはその多くの論文で、感染収束後も長期に渡り注意が必要な状況であることが警告されており、対策としてIT技術を活用して人々の孤独感を緩和させる工夫や、メンタルの問題が生じた際に適切な専門機関に円滑につなぐことの重要性が強調されている^{4),5),6),7)}。我が国ではいまだに有効なワクチンがない中で

(2021年1月現在)、感染対策として物理的距離を保つことを強いられる状況が続いているが、これは個人の孤立を深める方向に作用しており、特に親元を離れて単身生活をしている学生に関しては多大な影響を及ぼすと思われ、大学生のメンタルヘルス悪化は強く懸念される場所である。このような理由により、精神科診療に対するニーズの高まりはしばらく続くことが予想される。治療が必要なケースについては我々が積極的に介入していくことになるが、そうなる前の予防的な関わりも重要である。関係諸機関と連携し、学生を孤立させない対策を今後も工夫していく必要があるだろう。

2) 現状の精神科診療体制について

精神科は3名の医師が非常勤で半日ずつ勤務しており、週3回の診療となっている。それぞれの医師は週1回半日のみの勤務である為、対応できる枠は限られる。精神科担当医が不在の際に不調を訴えて受診してくるケースは度々あり、そういう場合には所長の協力を得ながらどうにか対応しているのが現状である。しかし、稀ではあるが急性精神病状態などで精神科緊急対応が必要なケースもある。マンパワーや確保できる薬品の

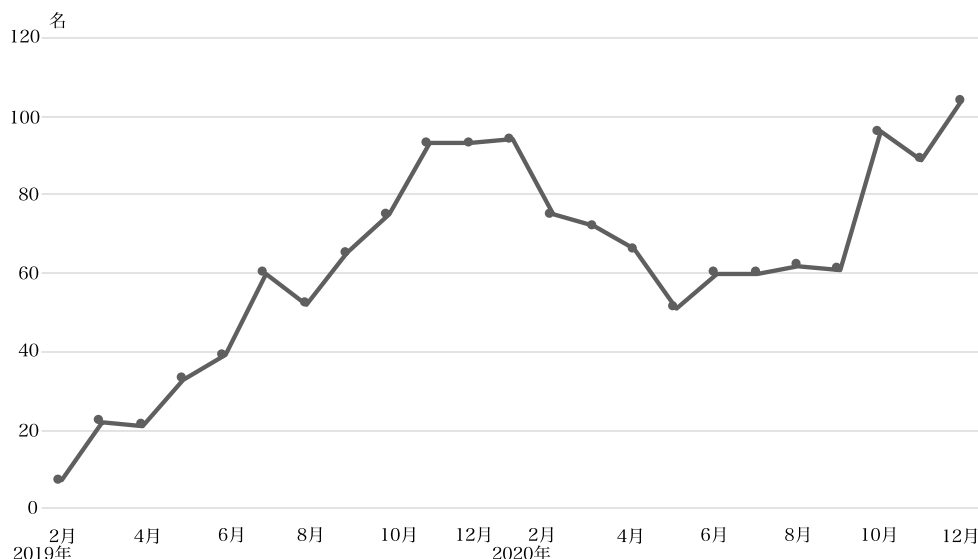


図4. 伊都診療所 精神科月別受診者数

制限等の問題から伊都診療所で可能な処置は限られる為、このような重症患者への対応には大きな困難を伴う。入院が必要な場合にもバックアップの医療機関が常時スタンバイしている訳ではなく、大学病院をはじめ関連の医療機関に一から相談することになるが、スムーズにいかないことも多い。特に留学生については言語の問題や家族との連絡の難しさなどから、入院受け入れ医療機関を探す際に大変な苦労を要する場合が殆どである。学内の留学生担当部署や大学病院、地域の基幹病院などとの日頃の連携が必要であり、今後の大きな課題である。

また、一般の精神科診療所では心理職や精神保健福祉士などのスタッフが勤務していることも多いが、伊都診療所では医師と看護師のみであり、この点では不十分な体制かも知れない。不調を訴えて受診してくる学生の中には、背景に発達面の偏りの問題を抱えているケースも少なくなく、多職種との連携の必要性を感じる場面は多い。しかし、人事面についてはクリアすべき課題が多く一朝一夕に進めることは困難である。診療所外の学内人材の活用などを検討するのが現実的なのかも知れない。

おわりに

九州大学伊都キャンパスに新たに設置された伊都診療所について、設置の経緯、精神科診療の観点からの診療所の利点及び課題について述べた。キャンパス内という特殊な環境に置かれている診療所であり手探りの状況は続いているが、徐々に学内外への認知度は高まっており、特に学内関係者の健康維持にはある程度の貢献ができる存在として浸透しつつある。精神科については、特に学生にとって継続して専門的治療が受けられる通院先としての選択肢が一つ増えた点は大きいと自負している。

日本では若年者の自殺率は依然として高い状況が続いており⁸⁾、大学生に関しても死因の第一位は自殺であり⁹⁾、メンタルヘルス対応は本学でも急務であるとされて久しい。しかし2010年の内田の報告¹⁰⁾によると、大学のメンタルヘルス対策に中心的役割を期待されている保健管理センターが自殺学生に関与したのは2割弱にすぎず、診断も治療も受けずに自殺する学生の方がはるかに多いという現状がある。相談機関や医療機関につながらない学生をどのようにサポートしていくかは重要な課題である。学生のメンタルヘルス問題は学業のパフォーマンスに影響している¹¹⁾との報告もあ

ることから、学生自らが相談に来るのをただ待つだけではなく、大学の教職員と連携を図り多面的な観点から気になる学生をいかに支援につなぐことができるかが鍵となる¹²⁾。日頃から学生に直接接する機会の多い事務職員や教員に対して研修を実施するなど、大学全体としてメンタルヘルス対策に取り組む姿勢が重要であろう。

先に述べた通り、伊都診療所は学外の医療機関と比較して学内関係者との連携がとりやすいという利点がある為、自発的に受診することが難しい学生を継続的な治療につなげやすいのではないかと考えられ、結果として学生のメンタルヘルス向上に寄与できるのではないかとと思われる。学内関係者からは実際にそのような役割を期待されている。その為にも、診療に携わる我々は精神科診療の最新の知見を得るなどの努力を怠ることなく、引き続き診療技術の研鑽に日々努めていかねばならない。

最後に、2020年度は他の医療機関と同様、伊都診療所もCOVID-19に様々な面で影響を受けた。具体的には遠隔診療への対応・施設内の感染防止対策の強化・学内で実施できなかった定期健康診断の実施協力などであり、日常診療に加えてのイレギュラーな業務への対応に苦慮した面も多かった。しかしここで、小規模であるが故に想定外のことにしても柔軟に対応できるネットワークの軽さを利点の一つとして追加したい。今後も様々な課題に直面することが予想されるが、大学構成員の健康維持及び地域医療への貢献の理念のもと、所長を中心とし一つ一つ丁寧に対応できるのではないかと期待している。

謝辞

本稿作成にあたり、多大な協力を頂いた伊都診療所職員、キャンパスライフ・健康支援センター保健師一同に深謝する。

引用文献

- 1) 九大広報 (2005): 伊都キャンパス誕生記念号, pp. 16-18.
- 2) 九州大学 (2015): 九州大学アクションプラン 2015-2020, pp.11-12.
- 3) 丸谷俊之 (2017): 留学生のメンタルヘルス. CAMPUS HEALTH, 54 (2).
- 4) Galea S, Merchant RM, Lurie N (2020): The mental health consequences of COVID-19 and physical distancing: The

- need for prevention and early intervention. *JAMA Intern Med*, 180(6): 817-818.
- 5) Loades ME, Chatburn E, Higson-Sweeney N, Reynolds S, Shafran R, Brigden A, Linney C, McManus MN, Borwick C, Crawley E (2020): Rapid Systematic Review: The Impact of Social Isolation and Loneliness on the Mental Health of Children and Adolescents in the Context of COVID-19. *J Am Acad Child Adolesc Psychiatry*, 59(11): 1218-1239.
- 6) Singh S, Roy D, Sinha K, Parveen S, Sharma G, Joshi G (2020): Impact of COVID-19 and lockdown on mental health of children and adolescents: A narrative review with recommendations. *Psychiatry Research*, 293: 113429.
- 7) Pfefferbaum B, North CS (2020): Mental Health and the Covid-19 Pandemic. *N Engl J Med*, 383(6): 510-512.
- 8) 厚生労働省: 令和2年度版自殺対策白書.
- 9) 布施泰子 (2020): 学部学生の死亡調査の結果から. *CAMPUS HEALTH*, 54 (2).
- 10) 内田千代子 (2010): 21年間の調査から見た大学生の自殺の特徴と危険因子—予防への手がかりを探る—. *精神神経雑誌*, 112: 543-560.
- 11) Bruffaerts R, Mortier P, Kiekens G, Auerbach RP, Cuijpers P, Demyttenaere K, Green JG, Nock MK, Kessler RC (2018): Mental health problems in college freshmen: Prevalence and academic function. *J Affect Disord*, 225: 97-103.
- 12) Storrie K, Ahern K, Tuckett A (2010): A systematic review: Students with mental health problems - a growing problem. *Int J Nurs Pract*, 16: 1-6.